

(別紙2)

審査結果の要旨 氏名 藤本 拓也

藤本拓也氏の『シオラン宗教思想の研究—神への欲求と無信仰—』は、ルーマニアに生まれ大戦後はフランスで亡命者として生きた特異な思想家、エミール・シオラン(1911-1995)の著作を丁寧に読み解き、いわゆる「神の死」以降の知識人による現代的「宗教思想」をそこに見て取った意欲的な論文である。

問題設定と研究史を適切に整理した「序論」に続いて、第1部「エクスタシーと始原」では、青年期の強烈なエクスタシー経験と頑固な不眠に伴う鬱的情動、および通常の意味での神への信仰を棄てたことでかえって強まるかのような絶対的「始原」への執着という、シオランの思想形成の基本条件の性格規定がなされる。第2部「神論および神を感じる主体の在り様」では、そうしたシオランの思索が展開される「境位」が、おもにキリスト教神秘主義の問題枠組みに拠って探究される。第3部「空概念をめぐる」では、60年代以降に増えてくる仏教やインド思想についての叙述内容が、55才のときの自殺未遂を経て強まっていくある種の諦念のあり方とともに検討される。最後に、「遍歴する僧」という東方教会的ないしインド宗教的イメージのもとに「シオランの最後の境位」を総括する「結論——沈黙の強度の経験」が置かれる。論文全体は合わせて13章から成る。

この世界および社会的共同性への強固な拒絶感と、これを超えた水準に想定される神(ないし神の彼方)への癒しがたい欲求を生涯にわたって語り続けたシオランは、キリスト教神秘思想や仏教・ヒンドゥー教の無ないし無我の思想への深い憧憬を吐露しつつも、そのどれにも帰依することができなかった。そうした思索遍歴、関心の推移や、伝統的宗教思想理解の内実を入念に探ることで、藤本氏は、キリスト教神秘家の説く神であれインド宗教の無や空であれ、シオランは理論の次元でその真理性を探求するのではなく、あくまで自身がこの世に生きることに伴う「鬱」的情態性との関わりの中かでこれを受け止めていることを指摘する。神や無が自らにどのように感じられるか、また感じられないか——神が感じられないこと自体が、情動の枯渇(アケーディアないしアパシー)という抑鬱の苦しみの根源にある——という水準に徹底して留まってこれらを論じているところにシオランの思想的営為の特質を見て取る。理論的主張ではなく思惟の独特の様態こそがシオランの叙述の意義を見ようとする本論文には、近年の海外での研究水準を凌駕するところもある。また、副次的試論として、広義の鬱病者であり自殺念慮に長く苦しんだシオランが、自らの癒されぬ抑鬱感に独自の宗教的意味を与えてなんらかこれを受容していく思索の歩みに、現代世界に蔓延する鬱的情態性を克服する一つの可能性、自殺念慮からの解放の一経路を読みとろうともしている。これは死生学の領域への寄与たりうるものであろう。

キリスト教やインドの宗教思想理解に不十分な点が散見され、またシオランを思想史ないし精神史の文脈に位置づける作業がなされていないといった問題は残るが、整合性を欠く情念的断片作家とも見えるシオランに、一貫した広義の宗教思想を見て取った成果は小さくない。よって本委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するものと判断する。